参考文献の書き方補足資料

　これは論文・レポート作成する際の参考文献の記載の仕方についてのメモです。実際の学術雑誌ではそれぞれに参考文献のフォーマットが決まっていることもあるため，必ずしもこれが唯一無二のスタイルではありません。しかし卒業論文・レポートで特に指定された書き方が存在しない場合は，本スタイルを参考にしていただければ幸いです。

まず，参考文献を書くときに最低限書くべき内容としては，以下があげられます。

書籍の場合：

①著者（編著者）

②発行年

③書籍名

④出版社

論文の場合：

①著者

②発行年

③論文名

④論文の所収されてある雑誌名（あるいは書名）

⑤巻数，号数，掲載ページ数

簡単な例

　加登豊 (1993) 『原価企画：戦略的コストマネジメント』日本経済新聞社．

　加登豊 (2000) 「サプライチェーン・マネジメント：組織間関係マネジメントの視点」『ビジネス・インサイト』秋期号 第8巻 第3号　30-39頁．

また引用については，①著者名，②発行年，(必要であれば該当するページ数)を記載します。特にデータや図表などを引用する場合は，それがどの本の何ページに載ってあるのかを記載するようにしてください。もちろん，参考文献と引用は，それぞれ１対１で対応する必要があることはいうまでもありません。

　最低限これらが整備されていれば，その内容をもとに全国の図書館などで容易に文献探索をすることが可能です。逆に，参考文献や引用が正しく表記されていなければ，どうでしょうか。みなさんが論文を作成する時に，参考にしたい！と思うデータがあっても，図書館等でそのデータの記載された文献を探し出すことさえ一苦労でしょう。つまり，参考文献や引用は，まずもって読者のために整備される必要があります。また，引用／出典先について明記しておくことは，読者にとっての”Data Availability”を高めるだけでなく，論文の信頼性を担保するためにも非常に重要な要素となります。そのため，卒業論文など審査を要する論文では特に気をつけてください。

　以上が，基本となる標記方法とその必要性ですが，他にもいくつか注意すべきルールがあります。以下では，代表的なルールについて例示していきます。細かくて少しイヤになりそうですが慣れると楽ですので，出来るだけ早く慣れましょう。

**その一　書籍の場合は二重カギ括弧（『　　』），論文の場合はかぎ括弧（「　　」）。さらに論文の場合は，該当するページ数の記載が必要です。**

加登豊 (1993) 『原価企画：戦略的コストマネジメント』日本経済新聞社．

加登豊 (2000) 「サプライチェーン・マネジメント：組織間関係マネジメントの視点」『ビジネス・インサイト』秋期号 第8巻 第3号　30-39頁．

**その二　単著の場合，共著の場合（「・」ナカグロで名前をつないでも良い）**

加登豊 (1993) 『原価企画：戦略的コストマネジメント』日本経済新聞社．

加登豊　李建 (2001)『ケースブック コストマネジメント』新世社．

加登豊　清水信匡　坂口順也　河合隆治 (2003)「組織間管理会計の研究課題とその意義：組織間関係における財務情報・非財務情報の併用」『原価計算研究』第27巻 第2号 40-49頁．

**その三　編著の場合：論文集や編著で，執筆者の担当箇所の明記されている場合**

酒向真理 (1998)「日本のサプライヤー関係における信頼の役割」（藤本隆宏　西口敏宏　伊藤秀史編『リーディングス・サプライヤーシステム―新しい企業間関係を創る』 有斐閣 1998年 41-70頁 所収）．

**その四　著者が同じ年に複数の文献を書いている場合，発行年の後に，a,b,c･･･をつけ，区分する。例えば， (坂口，2002a；坂口2002b)と標記する。**

坂口順也 (2002a)「管理会計領域における組織間関係への注目と研究の進展」『六甲台論集』第49巻 第2号 13-27頁．

坂口順也 (2002b)「日本企業を対象とした組織間コストマネジメント研究の現状と課題：R, Cooperの研究を中心として」『京都経済短期大学論集』第9巻 第2号 53-72頁．

**その五　洋文献の場合[[1]](#footnote-1)**

単著の場合

Axelrod, R. (1984) *The Evolution of cooperation*, Basic Books.（松田裕之訳『つきあい方の科学 : バクテリアから国際関係まで』ミネルヴァ書房　1998年）．

共著の場合

Cooper, R. and R. Slagmulder (1999) *Supply Chain Development for the Lean Enterprise- Interorganizational Cost Management*, Productivity, Inc.（清水孝　長谷川恵一監訳『企業連携のコスト戦略』ダイヤモンド社 2000年）.

論文の場合

Ittner, C. D., W. Lanen, and D. F. Larcker, (2002) “The Association Between Activity- Based Costing and Manufacturing Performance”, *Journal of Accounting Research*, Vol.40, pp.711-726.

　洋書の場合，*書名はイタリック*で統一して表記してあげると読み手に優しい。

最後に，参考文献リストは，洋文献，和文献をそれぞれアルファベット順，50音順で並び替え，分かりやすく明示してあげる必要があります。上記にあるように，複数行にわたる場合は，MS Wordであれば “ぶら下げインデント”を指定してやると見やすくなります。

その他のポイント（１）

　ページ数の記載については，基本的に和文献なら「頁」（ページという漢字！），洋文献なら「p」を用いるようにしています。さらに複数ページにまたがる引用については，「4-11頁」あるいは，「pp.4-11」と記載しています。

その他のポイント（２）

　各文献の末尾にピリオド（あるいは句点）があるのにお気づきでしょうか？私は特に指定がない場合，読点は「，」句点は「．」を用いることが多いです。このピリオド（あるいは句点）は見落としやすいため，気をつけてください。

その他のポイント（３）

　未公刊の論文などを引用する際には，巻数・号数・ページ数がわかりません。そのような場合，和雑誌であれば「近刊」洋雑誌であれば「forthcoming」と記載します。

その他，より詳細な情報は科学技術情報流通技術基準（SIST）による書き方を参考にしてください。以下のURLから「参考文献の役割と書き方」の小冊子を入手できます。

http://www.sist-jst.jp/pdf/SIST\_booklet2009.pdf

また，科学技術情報流通技術基準（SIST）のホームページ（http://www.sist-jst.jp/）では，他にも学術論文作成に有益な情報が多数掲載されています。

# 引用の書き方についての補足

**その一　文中引用の方法について**

* ････である(小林，2004)。
* Dekker(2004)によれば，･････
* Gietzmann(1996，pp.614-616)は，不完備契約の理論を用いて，組織間コントロールの問題について以下のように･･･････
* ････は，「束の間の信頼(Swift trust)」(Meyerson *et al*.，1996)になるリスクも存在･･･

引用に際しては，①誰の引用であるのか？②事実やデータは信用できるのか？など他にもいくつか注意すべき点があります。一つ，重要なポイントとして，それは他人の意見なのか？自分の意見なのか？ということをしっかりと区分して書く必要があります。

**その二　図表等の引用の方法について**

　図表3　真鍋=延岡(2003)による「信頼の源泉」の枠組み

|  |  |
| --- | --- |
|  | 信頼の形成メカニズムの特性 |
| 直接的 | 間接的 | 多義的 |
| 信頼の源泉の一般性 | 関係特殊的 | 経済的損得計算 | 経験 | 関係性 |
| 社会普遍的 | 公的ルール | 評判 | 文化 |

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（出所）真鍋=延岡(2003，p.56)より引用

　直接，図表などを引用する場合には，上記のように『（出所）真鍋=延岡(2003，p.56)より引用』を書きます。もし，みなさんが何かしら図表に手を加えた場合は，『（出所）真鍋=延岡(2003，p.56)を加筆・修正』となります。「出所」の他に，「出典」，「引用」という言葉でもOKですが，論文全体を通して統一されている必要があります。

1. さらに，私は以下のように記載しています。1つは，著者名は，第一著者はLast nameを先に記載し，First nameのイニシャルのみ略記しています。略記する際に「．」を忘れないようにしてください。共著の場合，第二著者以降は，First nameのイニシャルを先に記載し，Last nameを記載します。もう一つは，書名は，*斜体(Italic)*で記載するということです。洋文献の記載方法については，他にもいくつか注意点やレパートリーがあるので，分からないときは直接お聞きください。 [↑](#footnote-ref-1)